

宋元時代の化粧道具箱の木地制作における素地の研究

-上海博物館所蔵《黒漆蓮弁形奩》の復元模造を通して-

文化財保存学専攻

保存修復研究領域（工芸）

1320932 LI YUZE

本研究は、上海博物館所蔵の宋元代の作品《黒漆蓮弁形奩》の復元模造を通じた、木地制作における素地の研究を目的とする。宋元代の無文漆器は、化粧道具箱としての作例が多く、優れた造形を持つ。特に本作品は保存状態も良好で、類まれな魅力を感じさせ、どのような木地で作られたのか、強い関心を抱かせる。長い間謎に包まれていた宋元代の化粧道具箱の木地構造については、近年、科学分析で徐々に明らかになっているが、作品の復元模造から木地制作を分析した先行研究はきわめて少ない。

本研究では、《黒漆蓮弁形奩》の復元模造を通じて、宋元代の化粧道具箱とその歴史背景との関連を探り、合わせて木地構造の発展過程や、圈疊胎の出現との関係を考察する。具体的には、蓋部分の圈疊胎構造の制作工法と、他の素地の制作工法を比較検証し、それぞれの構成素材と制作技法の特徴を分析する。

本論文は、次の3章から構成される。

第1章「上海博物館《黒漆蓮弁形奩》—基礎情報」では、作品の現状から基礎情報を確認する。まず先行研究のX-CT画像で得られた内容と自身の見解を述べ、時代背景について確認する。本作品が発見された墓主の任氏（レン氏）一族は、青浦（チンプ）県の県誌にも記録が残る社会的地位の高い一族である。また同じ墓から官窯磁器も出土していることから、本作品は当時としても高品質の奩だったと思われる。そして奩の形式が多層へと発展した背景に、宋元代の生活様式の変化があることを論じ、《黒漆蓮弁形奩》の特徴を同時代の他の奩と比較分析する。

第2章「作品の木地調査および技法検証」では、本作品の木地について、先行研究で指摘されている木の種類、組み合わせ方、曲げ工法を確認する。蓋部分は、「圈疊胎」の技法で作られているが、近年、漆器の発掘調査報告書や研究論文などで、薄く細長い木板を積み上げた圈疊胎漆器がしばしば紹介されている。それに関しては、これまで詳細な先行研究がなかったが、筆者は圈疊胎の奩を女性の化粧道具箱として捉え、曲線で複雑な形状をつくる圈疊胎工法について、技法的な検証実験を試みる。まず資料の検討と他の素

地との比較から、再現実験を行い、次いで、曲げられた側板とT字工法で作った底板の検討結果から、《黒漆蓮弁形奩》の木地を解明する。

第3章「復元模造」では、検証結果から得られた工法で作品木地を制作し、布貼りを行う。そして骨粉を使用した下地の上に、黒漆（現在の素黒目漆に近い）を塗り、復元模造作品を制作する。最後に、本来、周囲に貼り巡らされていたと思われる薄銀板の銀釦（覆輪）について言及し、復元模造の工程と手順を論じる。

終章で本論文の総括と、今後の課題と展望について述べる。